

2023年12月6日 実施分

【演習問題の解答例】

- 1** (1) $f(x, y) = 2x^2 + xy + y^2 - 2x + 3y - 10 = 0$ ($y = \varphi(x)$) の両辺を x で微分すると

$$4x + y + xy' + 2yy' - 2 + 3y' = 0 \quad \therefore \varphi'(x) = y' = -\frac{4x + y - 2}{x + 2y + 3} \quad (*)$$

を得る。特に、 $\varphi'(0) = -\frac{-5 - 2}{-10 + 3} = -1$ より、求める接線と法線の方程式はそれぞれ

$$\begin{aligned} y - (-5) &= \varphi'(0)x & \therefore y = -x - 5 \\ y - (-5) &= -\frac{1}{\varphi'(0)}x & \therefore y = x - 5 \end{aligned}$$

$b = \varphi(a)$ とおく。また、 $\varphi(x)$ が点 $x = a$ で極値をとれば、 $\varphi'(a) = 0$ なので、(*) から、 $b = 2 - 4a$ をみたす。よって、 $a \neq 1$ のとき、 $\varphi''(a) = -\frac{f_{xx}(a, 2 - 4a)}{f_y(a, 2 - 4a)} = -\frac{4}{a + 2(2 - 4a) + 3} = \frac{4}{7(a - 1)}$ を得る。

- (2) $f(x, y) = x^3 + y^3 - 3xy - 3 = 0$ ($y = \varphi(x)$) の両辺を x で微分すると

$$3x^2 + 3y^2y' - 3y - 3xy' = 0 \quad \therefore \varphi'(x) = y' = \frac{x^2 - y}{x - y^2} \quad (*)$$

を得る。特に、 $\varphi'(\sqrt[3]{3}) = \frac{(\sqrt[3]{3})^2}{\sqrt[3]{3}} = \sqrt[3]{3}$ より、求める接線と法線の方程式はそれぞれ

$$y = \varphi'(\sqrt[3]{3})(x - \sqrt[3]{3}) = \sqrt[3]{3}x - \sqrt[3]{9}, \quad y = -\frac{1}{\varphi'(\sqrt[3]{3})}(x - \sqrt[3]{3}) = -\frac{x}{\sqrt[3]{3}} + 1$$

$b = \varphi(a)$ とおく。また、 $\varphi(x)$ が点 $x = a$ で極値をとれば、 $\varphi'(a) = 0$ なので、(*) から、 $b = a^2$ をみたす。よって、 $a \neq 0, 1$ のとき、 $\varphi''(a) = -\frac{f_{xx}(a, a^2)}{f_y(a, a^2)} = -\frac{6a}{3(a^2)^2 - 3a} = \frac{2}{1 - a^3}$ を得る。

- (3) $f(x, y) = 2x^3 - x^2y + y^2 = 0$ ($y = \varphi(x)$) の両辺を x で微分すると

$$6x^2 - 2xy - x^2y' + 2yy' = 0 \quad \therefore \varphi'(x) = y' = \frac{2x(3x - y)}{x^2 - 2y} \quad (*)$$

を得る。特に、 $\varphi'(-1) = \frac{(-2)(-2)}{1+2} = \frac{4}{3}$ より、求める接線と法線の方程式はそれぞれ

$$\begin{aligned} y - (-1) &= \varphi'(-1)(x + 1) & \therefore y = \frac{4}{3}x + \frac{1}{3} \\ y - (-1) &= -\frac{1}{\varphi'(-1)}(x + 1) & \therefore y = -\frac{3}{4}x - \frac{7}{4} \end{aligned}$$

$b = \varphi(a)$ とおく。また、 $\varphi(x)$ が点 $x = a$ で極値をとれば、 $\varphi'(a) = 0$ なので、(*) から、 $a = 0$ または $b = 3a$ をみたす。ここで、 $a = 0$ のとき、 $b = 0$ より、 $\varphi'(0)$ は存在しない。よって、 $a \neq 0, 6$ のとき、 $\varphi''(a) = -\frac{f_{xx}(a, 3a)}{f_y(a, 3a)} = -\frac{12a - 2(3a)}{-a^2 + 2(3a)} = \frac{6}{a - 6}$ を得る。

- (4) $f(x, y) = x^4 - 2x^2y + y^3 = 0$ ($y = \varphi(x)$) の両辺を x で微分すると

$$4x^3 - 4xy - 2x^2y' + 3y^2y' = 0 \quad \therefore \varphi'(x) = y' = \frac{4x(x^2 - y)}{2x^2 - 3y^2} \quad (*)$$

を得る。特に、 $\varphi'(1) = 0$ より、 $(1, 1)$ における接線の方程式は $y = 1$ であり、法線の方程式は $x = 1$ である。

$b = \varphi(a)$ とおく。また、 $\varphi(x)$ が点 $x = a$ で極値をとれば、 $\varphi'(a) = 0$ なので、(*) から、 $a = 0$ または $b = a^2$ をみたす。ここで、 $a = 0$ のとき、 $b = 0$ より、 $\varphi'(0)$ は存在しない。よって、 $a \neq 0, \pm\sqrt{2/3}$ のとき、 $\varphi''(a) = -\frac{f_{xx}(a, a^2)}{f_y(a, a^2)} = -\frac{4(3a^2 - a^2)}{-2a^2 + 3(a^2)^2} = \frac{8}{2 - 3a^2}$ を得る。

2 (1) [1] (1) より

$$0 = f(a, b) = f(a, 2 - 4a) = 14a(a - 2) \quad \therefore a = 0, 2$$

がわかる。よって、 $\varphi''(0) = -\frac{4}{7} < 0$, $\varphi''(2) = \frac{4}{7} > 0$ から、 $\varphi(x)$ は点 $x = 0$ で極大値（かつ最大値）2 をとり、点 $x = 2$ で極小値（かつ最小値）-6 をとる。なお、曲線 $f(x, y) = 0$ は橢円を表す。

(2) [1] (2) より

$$0 = f(a, b) = f(a, a^2) = (a^3 + 1)(a^3 - 3) \quad \therefore a = -1, \sqrt[3]{3}$$

がわかる。よって、 $\varphi''(-1) = 1 > 0$, $\varphi''(\sqrt[3]{3}) = -1 < 0$ から、 $\varphi(x)$ は点 $x = -1$ で極小値 1 をとり、点 $x = \sqrt[3]{3}$ で極大値 $(\sqrt[3]{3})^2 = \sqrt[3]{9}$ をとる。なお、曲線 $f(x, y) = 0$ はデカルトの正葉線の1つである。

(3) [1] (3) より

$$0 = f(a, b) = f(a, 3a) = a^2(9 - a) \quad \therefore a = 0, 9$$

がわかる。よって、 $\varphi''(9) = 2 > 0$ から、 $\varphi(x)$ は点 $x = 9$ で極小値 27 をとる。

(4) [1] (4) より

$$0 = f(a, b) = f(a, a^2) = a^4(a^2 - 1) \quad \therefore a = 0, \pm 1$$

がわかる。よって、 $\varphi''(\pm 1) = -8 < 0$ から、 $\varphi(x)$ は点 $x = \pm 1$ で極大値（かつ最大値）1 をとる。ここで、 $0 \leq x^2 = \varphi(x) \pm |\varphi(x)|\sqrt{1 - \varphi(x)}$ なので、 $\varphi(x) \leq 1$ に注意する。

3 (i) 最初に、 $f(x, y)$ が極値をとる可能性のある点 (a, b) の候補をラグランジュの未定乗数法で求める。つまり、条件 $g(x, y) = 0$ の下で、 $f(x, y)$ がある点 (a, b) で極値をとると仮定する。そのとき、 $a^2 + b^2 = 2$ から、 $g_x(a, b) = 2a \neq 0$ または $g_y(a, b) = 2b \neq 0$ をみたすので、 $F(x, y, \lambda) = f(x, y) - \lambda g(x, y)$ とおくと、ラグランジュの未定乗数法により、ある実数 α が存在して

$$0 = F_x(a, b, \alpha) = a(3a - 2\alpha), \quad 0 = F_y(a, b, \alpha) = b(3b - 2\alpha), \quad 0 = -F_\lambda(a, b, \alpha) = g(a, b) = a^2 + b^2 - 2$$

が成り立つ。ここで、 $ab = 0$ のとき、 $a^2 + b^2 = 2$ より、 $(a, b) = (0, \pm\sqrt{2}), (\pm\sqrt{2}, 0)$ を得る。 $ab \neq 0$ のとき、 $a = b = \frac{2}{3}\alpha$ なので、 $0 = g(a, b) = \frac{8}{9}\alpha^2 - 2$ から、 $a = b = \pm 1$ で、 $(a, b) = (1, 1), (-1, -1)$ がわかる。

(ii) $C = \{(x, y) \mid g(x, y) = 0\}$ は閉曲線（=閉じた曲線）なので、この曲線を1周するときの値の変化を見れば極大、極小が判定できる。実際、点 (x, y) を円 C に沿って反時計回りに移動させれば、 $f(x, y)$ の値は

(x, y)	$(\sqrt{2}, 0)$	\cdots	$(1, 1)$	\cdots	$(0, \sqrt{2})$	\cdots	$(-\sqrt{2}, 0)$	\cdots	$(-1, -1)$	\cdots	$(0, -\sqrt{2})$	\cdots	$(\sqrt{2}, 0)$
$f(x, y)$	$2\sqrt{2}$	\searrow	2	\nearrow	$2\sqrt{2}$	\searrow	$-2\sqrt{2}$	\nearrow	-2	\searrow	$-2\sqrt{2}$	\nearrow	$2\sqrt{2}$

と変化するので、各候補点での極大・極小が次のように判定される。点 $(\sqrt{2}, 0), (0, \sqrt{2})$ で極大値（かつ最大値） $2\sqrt{2}$ をとり、点 $(-\sqrt{2}, 0), (0, -\sqrt{2})$ で極小値（かつ最小値） $-2\sqrt{2}$ をとる。更に、点 $(1, 1)$ で極小値 2 をとり、点 $(-1, -1)$ で極大値 -2 をとる。

(ii)' 以下では C が閉曲線でない場合にも対応できるように、 $g(x, y) = 0$ の陰関数を利用して直接、極値の判定を実行する。例えば、候補点 $(1, 1)$ での状況を調べてみよう。 $(1, 1)$ の近傍 $D_r(1, 1) = \{(x, y) \mid (x - 1)^2 + (y - 1)^2 < r^2\}$ で、 $g(x, y) = 0$ の陰関数 $y = \varphi(x)$ をとり ($g_y(1, 1) \neq 0$ に注意)， $f(x, y)$ を1変数化した関数 $h(x) = f(x, \varphi(x)) = x^3 + \{\varphi(x)\}^3$ を考える。 $h(x)$ は $(1, 1)$ の近傍で $f(x, y)$ に条件 $g(x, y) = 0$ を組み込んだ関数であるから、 $(1, 1)$ での極大・極小を判定するには $h''(1)$ の符号を調べればよい。ここで、 $h'(x) = 3[x^2 + \{\varphi(x)\}^2\varphi'(x)]$, $h''(x) = 3[2x + 2\varphi(x)\{\varphi'(x)\}^2 + \{\varphi(x)\}^2\varphi''(x)]$ であり、 $\varphi'(1), \varphi''(1)$ は $g(x, \varphi(x)) = 0$ の両辺を x で2回微分することで計算される ($\varphi(1) = 1$ に注意)。これが以下の方針である。

$$0 = \frac{d}{dx}g(x, \varphi(x)) = \frac{d}{dx}\{x^2 + \varphi(x)^2 - 2\} = 2x + 2\varphi(x)\varphi'(x) \quad \therefore \varphi'(1) = -\frac{1}{\varphi(1)} = -1$$

ここで、当然ながら、 $h'(1) = 0$ をみたしている（ラグランジュの未定乗数法が保証）。更に、 x で微分すると

$$0 = \frac{d^2}{dx^2}g(x, \varphi(x)) = 2 + 2\{\varphi'(x)\}^2 + 2\varphi(x)\varphi''(x) \quad \therefore \varphi''(1) = -\frac{1 + \{\varphi'(1)\}^2}{\varphi(1)} = -2$$

を得る。よって、 $h''(1) = 3[2 + 2\varphi(1)\{\varphi'(1)\}^2 + \{\varphi(1)\}^2\varphi''(1)] = 3(2 + 2 - 2) = 6 > 0$ なので、 $h(x)$ は $x = 1$ で極小値 $h(1) = 2$ をとる。つまり、 $f(x, y)$ は点 $(1, 1)$ で極小値 $f(1, 1) = h(1) = 2$ をとる。点 $(-1, -1)$ でも全く同様にして、 $f(x, y)$ は点 $(-1, -1)$ で極大値 $f(-1, -1) = -2$ をとることがわかる。2 点 $(0, \pm\sqrt{2})$ でも同様であり、 $f(x, y)$ は点 $(0, \sqrt{2})$ で極大値 $f(0, \sqrt{2}) = 2\sqrt{2}$ をとり、点 $(0, -\sqrt{2})$ で極小値 $f(0, -\sqrt{2}) = -2\sqrt{2}$ をとることがわかる。2 点 $(\pm\sqrt{2}, 0)$ では、 $g_y(\pm\sqrt{2}, 0) = 0$ なので、 $g(x, y) = 0$ の陰関数 $x = \psi(y)$ をとる必要があるが、考え方は前の場合と同じであり、 $f(x, y)$ は点 $(\sqrt{2}, 0)$ で極大値 $f(\sqrt{2}, 0) = 2\sqrt{2}$ をとり、点 $(-\sqrt{2}, 0)$ で極小値 $f(-\sqrt{2}, 0) = -2\sqrt{2}$ をとることが示される。

- (7) (i) 最初に、 $f(x, y)$ が極値をとる可能性のある点 (a, b) の候補をラグランジュの未定乗数法で求める。つまり、条件 $g(x, y) = 0$ の下で、 $f(x, y)$ がある点 (a, b) で極値をとると仮定する。そのとき、 $a^2 - b^2 = -1$ から、 $g_y(a, b) = -2b \neq 0$ をみたすので、 $F(x, y, \lambda) = f(x, y) - \lambda g(x, y)$ とおくと、ラグランジュの未定乗数法により、ある実数 α が存在して

$$0 = F_x(a, b, \alpha) = 2(1 - \alpha a), \quad 0 = F_y(a, b, \alpha) = b(3b + 2\alpha), \quad 0 = -F_\lambda(a, b, \alpha) = g(a, b) = a^2 - b^2 + 1$$

が成り立つ。ここで、 $b \neq 0$ より、 $3b + 2\alpha = 0$ をみたす。そして、 α を消去して、 $0 = 2(1 - \alpha a) + a(3b + 2\alpha) = 2 + 3ab$ から、 $a = -\frac{2}{3b}$ を得る。よって、 $0 = g\left(-\frac{2}{3b}, b\right) = \frac{(3b^2 + 1)(3b^2 - 4)}{9b^2}$ なので、 $b = \pm\frac{2}{\sqrt{3}}$ を導く。また、 $a = -\frac{2}{3}\left(\pm\frac{\sqrt{3}}{2}\right) = \mp\frac{1}{\sqrt{3}}$ を知る。こうして、 $(a, b) = \left(\frac{1}{\sqrt{3}}, -\frac{2}{\sqrt{3}}\right), \left(-\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ がわかる。

(ii) $H = \{(x, y) \mid g(x, y) = 0\}$ は有界でないので、 $g(x, y) = 0$ の陰関数を利用して極値の判定を実行する。 $g_y\left(\pm\frac{1}{\sqrt{3}}, \mp\frac{2}{\sqrt{3}}\right) = \pm\frac{4}{\sqrt{3}} \neq 0$ から、2 点 $\left(\pm\frac{1}{\sqrt{3}}, \mp\frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ の近傍で $g(x, y) = 0$ の C^2 級の陰関数 $y = \varphi(x)$ は存在する。例えば、点 $\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ の近傍 $D_r\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{2}{\sqrt{3}}\right) = \{(x, y) \mid \left(x + \frac{1}{\sqrt{3}}\right)^2 + \left(y - \frac{2}{\sqrt{3}}\right)^2 < r^2\}$ で、 $g(x, y) = 0$ の陰関数 $y = \varphi(x)$ をとり、 $f(x, y)$ を1変数化した関数 $h(x) = f(x, \varphi(x)) = 2x + \{\varphi(x)\}^3$ を考える。 $h(x)$ は $\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ の近傍で $f(x, y)$ に条件 $g(x, y) = 0$ を組み込んだ関数であるから、 $\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ での極大・極小を判定するには $h''\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right)$ の符号を調べればよい。ここで、 $h'(x) = 2 + 3\{\varphi(x)\}^2\varphi'(x)$, $h''(x) = 6\varphi(x)\{\varphi'(x)\}^2 + 3\{\varphi(x)\}^2\varphi''(x)$ であり、 $\varphi'\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right), \varphi''\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right)$ は $g(x, \varphi(x)) = 0$ の両辺を x で2回微分することで計算される ($\varphi(-\frac{1}{\sqrt{3}}) = \frac{2}{\sqrt{3}}$ に注意)。これが以下の方針である。

$$0 = \frac{d}{dx}g(x, \varphi(x)) = \frac{d}{dx}\{x^2 - \varphi(x)^2 + 1\} = 2x - 2\varphi(x)\varphi'(x) \quad \therefore \varphi'\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = \frac{-\frac{1}{\sqrt{3}}}{\frac{2}{\sqrt{3}}} = -\frac{1}{2}$$

ここで、当然ながら、 $h'\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = 0$ が成り立つ(ラグランジュの未定乗数法が保証)。更に、 x で微分すると

$$0 = \frac{d^2}{dx^2}g(x, \varphi(x)) = 2 - 2\{\varphi'(x)\}^2 - 2\varphi(x)\varphi''(x) \quad \therefore \varphi''\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = \frac{1 - \frac{1}{4}}{\frac{2}{\sqrt{3}}} = \frac{3\sqrt{3}}{8}$$

を得る。よって、 $h''\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = 6 \cdot \frac{2}{\sqrt{3}} \cdot \frac{1}{4} + 3 \cdot \frac{4}{3} \cdot \frac{3\sqrt{3}}{8} = \frac{5\sqrt{3}}{2} > 0$ なので、 $h(x)$ は $x = -\frac{1}{\sqrt{3}}$ で極小値 $h\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = \frac{2}{3\sqrt{3}}$ をとる。つまり、 $f(x, y)$ は点 $\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ で極小値 $f\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}, \frac{2}{\sqrt{3}}\right) = h\left(-\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = \frac{2}{3\sqrt{3}}$ をとる。点 $\left(\frac{1}{\sqrt{3}}, -\frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ でも全く同様にして、 $f(x, y)$ は点 $\left(\frac{1}{\sqrt{3}}, -\frac{2}{\sqrt{3}}\right)$ で極大値 $f\left(\frac{1}{\sqrt{3}}, -\frac{2}{\sqrt{3}}\right) = -\frac{2}{3\sqrt{3}}$ をとることがわかる。

注意 $g(x, y) = 0$ の構造が簡単なので、極大・極小の判定に関しては、次のような考察も可能。曲線 $g(x, y) = x^2 - y^2 + 1 = 0$ は、共有点をもたない2本の曲線 $y = \pm\sqrt{x^2 + 1}$ からなる。点 $(-1/\sqrt{3}, 2/\sqrt{3})$ は曲線 $C_1 : y = \sqrt{x^2 + 1}$ 上にあり、 C_1 上では $f(x, y) = 2x + y^3 \rightarrow \infty$ ($x \rightarrow \pm\infty$) となるから、 $(-1/\sqrt{3}, 2/\sqrt{3})$ では極小値(C_1 上の最小値)をとることが分かる。一方、点 $(1/\sqrt{3}, -2/\sqrt{3})$ は $C_2 : y = -\sqrt{x^2 + 1}$ 上にあり、 C_2 上では $f(x, y) = 2x + y^3 \rightarrow -\infty$ ($x \rightarrow \pm\infty$) となるから、 $(1/\sqrt{3}, -2/\sqrt{3})$ では極大値(C_2 上の最大値)をとることが分かる。

【レポート課題の解答例】

- 4** $f(x, y) = 0$ の定める陰関数 $y = \varphi(x)$ について考える. $f(x, y) = x^3 + 3x^2 + y^2 - 5 = 0$ ($y = \varphi(x)$) の両辺を x で微分すると

$$0 = 3x^2 + 6x + 2yy' = 2yy' + 3x(x+2) \quad \therefore \varphi'(x) = y' = -\frac{3x(x+2)}{2y} = -\frac{3x(x+2)}{2\varphi(x)} \quad (*)$$

$b = \varphi(a)$ とおくとき, $f(a, b) = 0$ であり, $\varphi'(a) = 0$ ならば, $\varphi''(a) = -\frac{f_{xx}(a, b)}{f_y(a, b)} = -\frac{3(a+1)}{b}$ となる. (実は $(*)$ は $\varphi'(a) = -\frac{f_x(a, b)}{f_y(a, b)} = -\frac{3a(a+2)}{2b}$ であった.) $\varphi(x)$ が点 $x = a$ で極値をとれば, $\varphi'(a) = 0$ なので, $(*)$ から, $a = 0$ または $a = -2$ が導かれる.

- $a = 0$ のとき, $0 = f(0, b) = b^2 - 5$ より, $b = \pm\sqrt{5}$. $y = \varphi(x)$ が点 $(0, \sqrt{5})$ の近傍で定まる陰関数ならば, $\varphi''(0) = -\frac{3}{\sqrt{5}} = -\frac{3\sqrt{5}}{5} < 0$ であるから, この $\varphi(x)$ は $x = 0$ で極大値 $\sqrt{5}$ をとる. 一方, $y = \varphi(x)$ が点 $(0, -\sqrt{5})$ の近傍で定まる陰関数ならば, $\varphi''(0) = -\frac{3}{-\sqrt{5}} = \frac{3\sqrt{5}}{5} > 0$ であるから, この $\varphi(x)$ は $x = 0$ で極小値 $-\sqrt{5}$ をとる.
- $a = -2$ のとき, $0 = f(-2, b) = b^2 - 1$ より, $b = \pm 1$. $y = \varphi(x)$ が点 $(-2, 1)$ の近傍で定まる陰関数ならば, $\varphi''(-2) = -\frac{3(-1)}{1} = 3 > 0$ であるから, この $\varphi(x)$ は $x = -2$ で極小値 1 をとる. 一方, $y = \varphi(x)$ が点 $(-2, -1)$ の近傍で定まる陰関数ならば, $\varphi''(-2) = -\frac{3(-1)}{-1} = -3 < 0$ であるから, この $\varphi(x)$ は $x = -2$ で極大値 -1 をとる.

- 5** (i) 最初に, $f(x, y)$ が極値をとる可能性のある点 (a, b) の候補をラグランジュの未定乗数法で求める. 条件 $g(x, y) = 0$ の下で, $f(x, y)$ がある点 (a, b) で極値をとると仮定する. そのとき, $g(a, b) = 0$ から, $g_x(a, b) = 2a + b \neq 0$ または $g_y(a, b) = a + 2b \neq 0$ をみたす (実際, 両方とも等号なら $(a, b) = (0, 0)$ となるがこれは $g(a, b) = 0$ をみたさない). そこで, $F(x, y, \lambda) = x + y - \lambda(x^2 + xy + y^2 - 1)$ とおくと, ラグランジュの未定乗数法により, ある実数 α が存在して

$$\begin{aligned} 0 &= F_x(a, b, \alpha) = 1 - \alpha(2a + b), \quad 0 = F_y(a, b, \alpha) = 1 - \alpha(a + 2b), \\ 0 &= -F_\lambda(a, b, \alpha) = g(a, b) = a^2 + ab + b^2 - 1 \end{aligned}$$

が成り立つ. 最初の 2 式より $2a + b = 1/\alpha = a + 2b$ であるから, $b = a$. これを第 3 式に代入して, $3a^2 - 1 = 0$ から $a = \pm 1/\sqrt{3}$ を得る. よって, $(a, b) = (1/\sqrt{3}, 1/\sqrt{3}), (-1/\sqrt{3}, -1/\sqrt{3})$ がわかる.

(ii) 横円 $E = \{(x, y) \mid g(x, y) = 0\}$ は有界かつ閉集合なので, 「有界かつ閉集合における連続関数は最大値と最小値をもつ」という事実を用いれば, $f(-1/\sqrt{3}, -1/\sqrt{3}) = -2\sqrt{3}/3 < 2\sqrt{3}/3 = f(1/\sqrt{3}, 1/\sqrt{3})$ から, 次のことがわかる. 条件 $g(x, y) = 0$ の下で $f(x, y) = x + y$ は点 $(-\sqrt{3}/3, -\sqrt{3}/3)$ で極小値 (かつ最小値) $-2\sqrt{3}/3$ をとり, 点 $(\sqrt{3}/3, \sqrt{3}/3)$ で極大値 (かつ最大値) $2\sqrt{3}/3$ をとる.

(ii)' [E が有界でない場合にも対応できる方法] $g(x, y) = 0$ の陰関数を利用して直接, 極値の判定を実行する. まず, 準備として, $g(x, y) = x^2 + xy + y^2 - 1 = 0$ の定める陰関数 $y = \varphi(x)$ の 2 次までの導関数を考える. $x^2 + xy + y^2 - 1 = 0$ ($y = \varphi(x)$) の両辺を x で微分して $2x + y - (x + 2y)y' = 0$. 更にこの両辺を x で微分して, $2 + y' + (1 + 2y')y' + (x + 2y)y'' = 0$. よって,

$$\varphi'(x) = y' = -\frac{2x+y}{x+2y} = -\frac{2x+\varphi(x)}{x+2\varphi(x)}, \quad \varphi''(x) = y'' = -\frac{2\{1+y'+(y')^2\}}{x+2y} = -\frac{2[1+\varphi'(x)+\{\varphi'(x)\}^2]}{x+2\varphi(x)}.$$

- $y = \varphi(x)$ が点 $(1/\sqrt{3}, 1/\sqrt{3})$ の近傍で定まる陰関数のとき, $\varphi(1/\sqrt{3}) = 1/\sqrt{3}$ と上の関係式より, $\varphi'(1/\sqrt{3}) = -1$, $\varphi''(1/\sqrt{3}) = -2/\sqrt{3}$. ここで, $h(x) = f(x, \varphi(x)) = x + \varphi(x)$ とおけば, $h'(1/\sqrt{3}) = 1 + \varphi'(1/\sqrt{3}) = 0$, $h''(1/\sqrt{3}) = \varphi''(1/\sqrt{3}) = -2/\sqrt{3} < 0$. よって, $h(\sqrt{3}/3) = 2\sqrt{3}/3$ は極大値である.
- $y = \varphi(x)$ が点 $(-1/\sqrt{3}, -1/\sqrt{3})$ の近傍で定まる陰関数のとき, $\varphi(-1/\sqrt{3}) = -1/\sqrt{3}$ と上の関係式より, $\varphi'(-1/\sqrt{3}) = -1$, $\varphi''(-1/\sqrt{3}) = 2/\sqrt{3}$. ここで, $h'(-1/\sqrt{3}) = 1 + \varphi'(-1/\sqrt{3}) = 0$, $h''(-1/\sqrt{3}) = \varphi''(-1/\sqrt{3}) = 2/\sqrt{3} > 0$. よって, $h(-\sqrt{3}/3) = -2\sqrt{3}/3$ は極小値である.